

中国社会文化学会・例会のお知らせ
(2018年度・第2回)

日時：2018年12月8日(土) 午後5時から7時

場所：学習院大学 西1号館201教室

(東京都豊島区目白1-5-1 JR山手線「目白」駅下車、会場まで徒歩約10分)

報告者及論題：

陳少明(中山大學哲學系教授)

「訓詁から義理へ：清代漢学の哲學的方法について、戴震と章炳麟を手がかりに」

司会：石井剛(東京大學大学院総合文化研究科教授)

言語：中国語(通訳あり)

共催：科研費基盤研究(B)「グローバル化する中国の現代思想と伝統に関する研究」

報告概要

本報告では、清代哲学に対するさまざまな評価に基づきながら、清代學術の訓詁的方法と実践が義理の構築に対して果たしていた影響について考察する。訓詁の思想史的還元における有効性を肯定しつつ、問題のポイントを、「それは宋学とは異なった別様の義理のありかたを提供しうるのかどうか」という点へと転じてみたい。分析によって明らかになるように、章炳麟は「語言縁起説」において、蔽われたものを解きほぐし、「道」を明らかにする訓詁の役割を提示しているが、そのような考察の方向性は啓発に富んでいると言える。それと同時に、近現代の研究実践において訓詁によって義理を論じた事例を参考にしながら、更なる広がりをもつ哲学のすがたを描こうとすることによって、関連する方法がもつ思想のポテンシャルを明らかにする。最終的には、言語哲学におけるさまざまな観点を分類しながら、古典言語が有する人類の文化経験を訓詁によって発掘することには重要な哲学的価値が具わっていることを明らかにする。総じて、清代漢学の哲学的遺産を総括することは、今日、中国哲学の発展の前途を展望する際に伝統を振り返る際の不可欠な要素となる。